

出挙木簡や版木、「庄」などの墨書土器が出土した北高木・荒畑遺跡がある（本

富山・二口五反田遺跡

- 1 所在地 富山県射水郡大門町二口五反田
- 2 調査期間 一九九三年（平5）一〇月
- 3 発掘機関 個人による表面採集
- 4 調査担当者 林寺巖州（採集者）
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代、奈良・平安時代、中世～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 二口五反田遺跡は、富山県のほぼ中央部に位置する。庄川右岸の扇状地上に立地しており、標高は約7mである。

遺跡は、圃場整備事業の実施に先立ち、一九九二年に行なわれた分布調査で発見され、翌年試掘調査が実施された。試掘調査では、弥生時代後期―古墳時代、奈良・平安時代の遺構が発見され、弥生時代中期・後期、古墳時代、奈良・平安時代、中世から近世の遺物が出土した。奈良・平安時代のもものは、八世紀中葉から九世紀後葉までのものがある。木簡は、一九九三年の圃場整備事業終了後に表面採集されたものである。

(1) 〔二口村〕_{〔庄力〕}

137×29×7 033

材は杉とみられる桎目板である。上端は左右に切り込みを入れ、下端は両側面を削り尖らせる。下端先端は鋭くなく、若干折損している可能性がある。

片面にわずかに墨痕が見えるが、文字は肉眼ではほとんど判読できない。赤外線テレビカメラ装置を通してみると、四文字が確認できる。上の二文字は下の二文字に比べて詰まっていて、一字分のスペースに収まっている。

171

地名が古代にまで遡る可能性を考えさせる資料といえよう。

下一文字は、断定ができないが、「庄」ではないかと思われる。庄については、荘園全体を表すほかに経営拠点としての庄所建物そのものを表す場合もあったといわれる。村の庄ということになれば、後者の用例を示す資料といえよう。

木簡は、左右の切り込みと下端を尖らせる特徴から付札とみられる。庄所へ送られてきた物品に付けられたものか、庄所の所有物であることを表すために付けられたものか、その用途については、現状ではよくわからない。

二口村の地名の由来については、用水の分水口があったためといわれ、また塞口が転化したものともいう。『和名類聚抄』によれば、平安時代には射水郡に塞口郷があり、現在の高岡市市街地を中心とする地域に比定されているが、はっきりしていない。遺跡の周辺は、

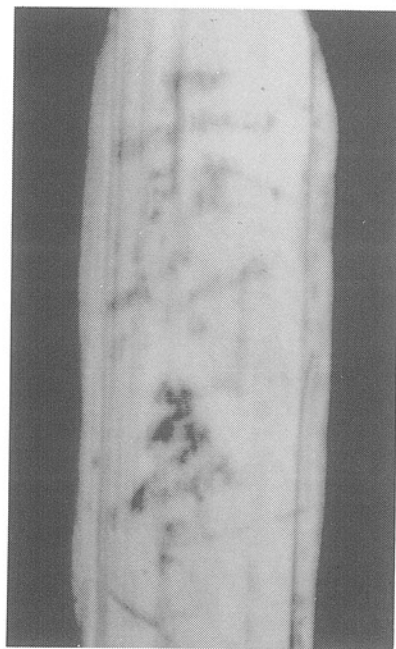


大伴家持が越中国司であった七四六年から七五一年頃に詠んだ歌の中に「三島野」(四〇一番ほか)にあたると考えられており、越中国の古代史を考える上で重要な地域である。今回見つかった木簡は、越中古代史の解明に新たな手がかりを加えるものといえよう。

9 関係文献

大門町教育委員会『大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告―県営ほ場整備事業に伴う試掘調査報告―』(一九九七年)

(久々忠義〈富山県埋蔵文化財センター〉)



赤外線写真 (部分)